

## 仏教東漸：藺田宗恵のメキシコ仏跡踏査旅行

三 宅 正 隆

### 目次

- 1 はじめに
- 2 時代背景：明治中後期の仏教青年運動
- 3 藺田宗恵と本願寺海外開教事業の背景
- 4 藺田宗恵とサンフランシスコ仏教会
- 5 仏教東漸と藺田宗恵の決意
- 6 藺田宗恵のメキシコ踏査旅行：フーサン（扶桑）とホイセン
- 7 おわりに

### 1 はじめに

1901（明治34）年に発行された『政教時報』という宗教雑誌に「米国の発見者は日本人」という見出しの短い記事が掲載されている<sup>1)</sup>。宗教雑誌の読者にとっては少々意外な内容で、つい見過ごしてしまいそうな記事であるが、少し読めばそれが浄土真宗西本願寺から米国へ初代開教師として派遣されていた藺田宗恵の一種の海外滞在報告であることがわかる。この記事が掲載された時には藺田は新たにドイツ駐在の命を受け、すでに米国にはいなかったが、このニュースはアメリカのいくつかの新聞でも報道され、『政教時報』の記事もその一つを引用翻訳して書かれている。記事は藺田がメキシコに行って、コロンブスよりも千年ほど前にすでに日本人僧がアメリカ大陸にやってきていた証拠を見つけたというものである。それにしても、サンフランシスコなどで伝道所を開設し、在米日本人信者や当地の信者を前に忙しい日々を送っているはずの藺田が、それもヨーロッパに旅立つ慌ただしい時期に、なぜわざわざメキシコに出向いて行ったのか。またなぜ一仏教徒のメキシコへの旅が現地の新聞で取りざたされたのかなど、色々な疑問がうかぶ。記事の見出しとなっている「米国の発見者は日本人」というのも、あまりにも常識的な歴史事実とは乖離し、訝しく思われる。しかしながら当時の様々な状況を考慮に入れると、なるほどと頷かせる事実が浮かび上がる。

以下、本論では『政教時報』に引用された新聞記事や、その他アメリカで掲載された数紙の記事の分析をもとに、藺田宗恵のアメリカでの開教の日々を振り返りつつ、藺田のメキシコ踏査旅行やコロンブス秘話ともいえるアメリカ「発見」に関する議論を再検討する。ただし、専門的な論争の検討は避け、もっぱら当時のアメリカでの新聞報道記事を中心に、藺田の一般にはあまり知られていないと思われる一面を、特に仏教東漸と呼ばれる仏教伝搬に注目して、明らかにすることに主眼を置く。最初に、記事が掲載された『政教時報』について説明し、当時の日本の宗教事情を垣間見る。そのあと藺田宗恵と本派本願寺のアメリカ開教事情を当時のアメリカで発行された新聞記事などに基づいて振り返り、藺田がメキシコへ想いを馳せた背景を探る。最後に、アメリカ大陸発見に関する論争と藺田のメキシコ踏査旅行を、これも新聞報道を中心に検証し、藺田にとっての仏教東漸の意味を考える。

## 2 時代背景：明治中後期の仏教青年運動

まず『政教時報』に掲載された記事を引用しておく。あとの議論と関係するので少々長くなるが、全文を引用する<sup>2)</sup>。

近着のウエストミンスター、ガゼット新聞は米国を発見したるは日本人かと題し日本の僧徒園田宗恵と称する人は、日本人が米国を発見したりと認め、且つ発見したるの特証と認むべきものを墨其西哥より携えて華盛頓に帰着せりとの事を報道したるが、尚ほボストン新聞通信員の報道に依れば、園田僧侶は夫の紀元490年の今の墨其西哥と同意義なる海を隔てたる土地に関してシン、ホーエイと云へる日本僧侶の記述せる記録に従うて探検をなしたるに、園田は墨其西哥中佛教の勢の及べる多数の証拠を認めたりといふ。其重なるものは墨其西哥の十二支十八宿、東洋風の押印殿字の紋標及日本より僅に伝訛したる名称数百等なりと云う。又墨其西哥の殿堂は西藏に於ける如く必ず南面し、又墨其西哥伝道教会の印度人と日本人との間には人種的酷似ある等、凡ての点より見て米国は日本人の発見したるものなるが如しといふ。此探検に対しては墨国古物学者バトルス氏、大に園田に援助を与えたる由。而して園田は此発見に対し一書を著わし、日本人が米国を発見したる事実を科学界に証示する見込なりと云ふ。

まずこの記事が掲載された『政教時報』であるが、この雑誌は1899（明治32）年1月に創刊され、1903（明治36）年の12月まで4年間にわたって月2回発行された定期刊行物である。発行者は発刊前年に発足した仏教徒国民同盟会という団体であるが、すぐに大日本仏教徒同盟会と改名されている<sup>3)</sup>。この大日本仏教徒同盟会は「仏教本来の面目を発揮し其感化によりて

先づ国民の一致力を染固にし漸く富国の術を講じて国家の独立と社会の文明とに資せんとする」ことを目的に設立された組織で<sup>4)</sup>、創刊号に寄せられた「祝辞」には近代仏教史に名前を連ねる島地黙雷、南條文雄、釋宗演、井上圓了、大内青巒、大草恵實などが名を連ねている。明治維新に仏教界は新政府による神道国教化政策をはじめ廃仏毀釈など様々な弾圧を経験する中で、内的には近代的な教団組織、制度の改革を目指し、またキリスト教解禁による危機感から、従来の伝統的な体質を改善し、近代的再生を目指して政治面でも積極的に発言し始め、仏教の復興に向けて運動を繰り広げた。このような仏教復興運動や仏教による国家運営を目指す運動の原動力となったのは、祝辞を寄せたような仏教界で活躍する宗教家よりもむしろ一般「青年仏教徒」とも呼べる若者の力が大きかった。それぞれ異なる宗派にも独自の青年会組織が結成され、宗派にとらわれない超宗派的な組織が、特に若者を中心に結成されたことは、伝統的な、ある意味で無気力に陥っていた仏教界が、この時代に置かれた状況を反映していると言える。

同盟会の運営の中心になったのは「大日本仏教青年会」と呼ばれる運動体の幹事をも務めていた近角常観や秦敏之、真岡湛海、百目木劍虹等といった若い仏教僧や信徒である<sup>5)</sup>。この大日本仏教青年会は1892（明治25）年1月帝国大学、第一高等学校、東京専門学校、慶應義塾、哲学館、法学院など各官私立諸学校で仏法の聞法や研究を志して結集していた学生有志が集まり「仏教青年総合会」を結成したのをきっかけに、さらにこれを母体に明治27年4月に発展的に創立された組織で、京都や地方の高等中学、寺院を中心に各地に支部を設け「教育事業、慈善事業、社会事業、伝道事業」など仏教主義をもって施設経営し、社会貢献を目指す全国規模の運動体となっていった。

大日本仏教徒同盟会の機関紙『政教時報』の創刊号では、「発刊の辞」に続いて巻頭記事として「公認教制度確立の必要」と「怪しむべし巢鴨監獄教誨事件」の2編が掲載されている。ちょうど同盟会発足時期は大日本帝国憲法や教育勅語が發布されて10年ほど経過した時で、まさに日本の国家権力の確立期にも当たり、仏教界も信教の自由や政教分離など近代性を持つと思われた理念、制度の導入を目指すも、現実にはキリスト教の影響力の増大を目にすると、一点排除の方向に向かい、時を同じくして起こった巢鴨監獄典獄任命に関わる事件を機に宗教法案反対運動を展開する中で公認教制度の実現を目指すなど、いわゆる政教問題について積極的に発言する場として始まったといえる<sup>6)</sup>。『政教時報』は毎号、全国各地の仏教青年会の活動を報告し運動を盛り上げるとともに、仏教教学の専門家だけでなく、法学、仏教史、比較仏教などの専門家による論説を掲載し、仏教青年会の運動の正当性をサポートした。この宗教法案もちょうど機関誌の主執筆者であった近角常観が欧米視察に出かける直前に貴族院で否決され、一応の成果をあげたと評価できるが、その後は徐々に政治的な発言は薄れていった。

組織的な運動としては、この時期キリスト教はまさに外敵として排斥の対象とされたが、他

方では、ある日本通のイギリス人が、キリスト教の輸入が日本に貢献した最大のものは仏教を覚醒させたことである<sup>7)</sup>、と指摘しているように、布教方法や社会貢献、若者や婦人を中心とする組織づくりなど、キリスト教会の活動から多くを学ぶとともに、一途な近代化路線から日本古来の伝統の見直しの機運が生まれるなど、若者を中心とする「仏教覚醒」運動が展開されたことも見逃せない。青年仏教会運動の中心にいた近角常観も特に2年間の欧米視察から、キリスト教を基盤とする西洋の近代化を見聞し、また宗教史を研究する中で、日本の近代化における宗教、つまり仏教の果たすべき役割の重要性を再認識した<sup>8)</sup>。特に西洋では、キリスト教による倫理的自己管理による個人主義と、カトリック的な教会やプロテスタント的「信団」による共同社会、集団主義が表裏をなしていることに気づき、帰国後は特に都会で地縁、血縁関係から自由になった若者たちに、仏教による個人の確立と、社会貢献の重要性を説いた。「大日本仏教青年会」主催の仏教夏期講習会への参加呼びかけ文に「今や教界益々多事。苟も吾人青年たるもの深く精神の修養に勉め、相互の団結を鞏固にせざるへからず」そして「眼中宗派の区別を没し、胸裡学校の城府を設けず、平等一致、相互の気脈を通し共に護法の大策」を語り合おうと記している<sup>9)</sup>。

このような目的で同盟会の機関紙として発刊された『政教時報』であったが、広告に「本誌載する所、社説、論説、会報、社会、雑録、信界、今昔の諸欄」とあるように、発行当初から巢鴨事件や公認教制度に関する論説などの他にも一般読者、若者にとって関心がありそうな、海外の出来事などについていろいろ情報を提供する記事を掲載していた。藪田のアメリカ発見についての記事掲載も、そのような観点からいえば、それほど違和感がなかったとも言える。

### 3 藪田宗恵と本願寺海外開教事業の背景

さて、『政教時報』の記事の主役である藪田宗恵であるが、アメリカでの報道では、上の引用にもあるように「日本から来た仏教僧」としか紹介されていない。彼は1899(明治32)年「布教の為北米合衆国桑港駐在」を命じられ、一年半余り仏教の伝道活動のためサンフランシスコに滞在した。渡米当時、藪田は京都の文学寮の教授職にあった。文学寮とは西本願寺が設立した教育機関で、1888年にそれまでの普通教校を統合し設立されたもので、現龍谷大学の前身である。藪田は西本願寺の末寺子弟の教育機関である大教校を卒業すると、本山から東京留学を命じられ、大学予備門をへて東京帝大文学部哲学科へ入った。1892(明治25)年卒業後すぐにこの文学寮教授となり、数年後には同寮長になっている<sup>10)</sup>。

先に述べた「大日本仏教青年会」の結成動機としてキリスト教の影響も大きかったが、この時期には京都でもキリスト教の信者が急増し、特に1884年に新島襄が校長を務めていた同志社英学校で、いわゆる「同志社リバイバル」と呼ばれる信仰覚醒運動が起こり、これに触発さ

れた形で仏教覚醒運動とも言える展開を見せた。京都ではこの「同志社リバイバル」を機に多くの学究青年が同志社を目指し、また多くの学生、若者が洗礼に走った。一方で、仏教諸派の本山を有するいわば仏教のお膝元の地として、明治政府の仏教弾圧政策を契機にそれぞれの派内外での改革、復興運動が起こり、特に東西本願寺では大学の学生や青年僧侶を中心として当時教学振興、宗務改革を訴えた改革運動が起こっていた<sup>11)</sup>。その中心的な組織として、東本願寺立の真宗大学（寮）と西本願寺立の里見了念を主盟とした「普通教校」があった。普通教校は当時の大谷光尊（明如上人）門主が僧侶に対する普通教育の必要性を痛感し、新知識を身につけた人材養成を目指して設立に至った仏教校で、当時としては極めて斬新な「先取り気風」を持った教育機関で、仏教関連以外にも多彩な一般科目の開講と外国語重視の教育を売りとした<sup>12)</sup>。西本願寺が設立したにも関わらず各宗派の優秀な学生が集まった。その学生有志を中心に「禁酒進徳」を標語に掲げ、禁酒と仏教徒の綱紀粛清を目的に1886（明治19）年に結成されたのが社会改良運動「反省会」で、翌年8月にはその機関誌である『反省会雑誌』の第1号が出版された<sup>13)</sup>。中心になったのは近角常観が東京帝大在学時に梵語の講師として着任することになる高楠順次郎らで、『政教時報』に先立つこと12年であった。宗門機関誌でありながら、どちらかといえば総合雑誌的で、宗教関連の記事以外にも幅広い分野の評論や論説、また雑記、海外新潮などの情報欄があり、また宗教誌としてはユニークな文界時評や文学などの欄もあった<sup>14)</sup>。後に大日本仏教徒同盟会の常務員となり、近角らとともに活躍した秦敏之なども『政教時報』が発行されるまでは『反省会雑誌』に大日本仏教青年会主催の釈尊降誕会や夏期講習会についての報告記事などを投稿している<sup>15)</sup>。

普通教校の「先取り気風」ともいえる一面は、当時の多くの雑誌が日清戦争後の日本の躍進ぶりを世界に向かって発信したいという意欲に燃え、競って英文欄や独仏欄を設けていたが、反省会はこの傾向が特に顕著で、機関誌に海外新潮の欄を設けたり、また「英文反省会雑誌」の発刊、海外留学生制度の開始と、海外に向かって積極的な情報発信を始めていた<sup>16)</sup>。西本願寺が設立した海外宣教会は当時他に類例のないような英文雑誌『アジアの宝珠』（*Bijou of Asia*）を発行し、英米仏独伊露など合計270ヶ所に向けて、部数にすれば1390部が毎号発送されていたという<sup>17)</sup>。藪田も帝大在学中1891（明治24）年にドイツ語の仏教書を翻訳しこの海外宣教会から『仏教概論』として出版したり<sup>18)</sup>、経典の英訳を出したりと外国語能力を遺憾なく発揮している<sup>19)</sup>。藪田と一緒に助開教師として渡米した西島覚了も渡米までこの文学寮に在学し、英語力を磨いていた<sup>20)</sup>。西本願寺が他の宗派に先駆けていち早く海外の開教に乗り出し、また初代開教師として藪田や西島に白羽の矢が立ったのも、このような事情が関係していると思われる。同会は国内向けには海外の仏教研究者などからの書簡や研究成果などを多く掲載した『海外仏教事情』と題した雑誌も発行し、欧米開教開始に向けた機運高揚に一役買っただけでなく、後で見る藪田のメキシコ探査の動機になったとも考えられる記事なども掲

載していた。

#### 4 藺田宗恵とサンフランシスコ仏教会

文学寮長の職にあった藺田は1899(明治32)年西本願寺から「布教の為北米合衆国桑港駐在」を命じられ、渡米の途についた<sup>21)</sup>。先にも触れたように、この時期仏教界は政府の宗教法案に対する激しい反対運動を展開していたが、西本願寺は一転政府を支持する態度を表明し、一種の孤立状態にあり、また宗門内でも様々な問題を抱えて、迷走状態にあった。このような中、法主明如やこの頃本派新門主についた光瑞(鏡如)門主らは特に海外布教に熱心で、1898(明治31)年開教事業の拡張を目指し、まず宮本恵順と本田恵隆を米国サンフランシスコへ布教視察に派遣することを決定した<sup>22)</sup>。この米国開教については教団の財政事情などから反対も多かったが、サンフランシスコでの開教嘆願のため帰国した一青年の働きかけもあって実現にこぎつけた。当時アメリカへの移民といえばハワイが主であった<sup>23)</sup>。主たる渡航者は熊本、広島、山口、和歌山などのいわゆる真宗王国と言われる地方からで、特にこの地域は本派本願寺の檀家が多く、渡航者の間で西本願寺への布教師派遣の要望が高まり、アメリカでの伝道、布教が始まることとなった。その後経済不況から仕事につけない生活困窮者が増え、政府の後押しもあり、米国本土への出稼ぎ、移民が急増することになる。本土への移民はハワイからの転航者も多かったが、ほとんどは上にあげた地域などからの青年男子で、一部「スクールボーイ」と呼ばれた留学や研究目的で在留したインテリもいたが、ほとんどが肉体労働者としての出稼ぎ渡航者であった。彼等の多くが新天地で言語、生活習慣などの違いから様々な困難な問題に日々直面していただろうことは想像に難くない。このような生活困窮者に救済の手を差し伸べたのがキリスト教教会であった<sup>24)</sup>。一部の人々はキリスト教に入信するも、特にハワイからの移民達はハワイでの本願寺開教師の活躍を引き合いに、本土でも開教師の派遣を強く望んだ。このような命を受けて一時帰国したのが平野仁三郎という若者であった。平野は西島覚了を通し、本山に働きかけ、開教師派遣を粘り強く訴えた。平野の熱意や門主の意向もあり、1897(明治30)年西本願寺は海外開教視察の実施を決定し、翌年宮本、本田両師がサンフランシスコへ向かうことになった。

派遣先のサンフランシスコで宮本恵順、本田恵隆が目にしたのは、風紀が乱れた日本人社会で、精神的支えを求めてやむなく戸を叩いたキリスト教にも馴染めないような人たちであった<sup>25)</sup>。やがて、本山からの派遣者の到着が知られるようになると、熱心な仏教徒信徒が相談に訪れるようになり、1898年7月にはサンフランシスコ近辺の仏教徒によってサンフランシスコ仏教会(San Francisco Buddhist Church)の前身となる仏教青年会が設立され<sup>26)</sup>、正式に布教者の派遣要請を本山に提出することになった。当時について藺田は「有志30余名の青

年が中心となってサンフランシスコ仏教青年会を結成し、八方に檄を飛ばして同士を集めるとともに、一方、特使を本願寺に送って開教使の派遣を懇請し」と回顧している<sup>27)</sup>。このような機運、要請をうけて、明如上人は前本願寺文学寮長蘭田宗恵と大学林出身の西島覚了の米国派遣を決定した。蘭田宗恵 37 歳の時である。日本ではキリスト教進出にあくまで対抗しようとした仏教界であったが、今度はキリスト教国で「異教」としての仏教布教が始まることになる。

開教師蘭田の渡欧米時の記録は宗恵の子である蘭田香勲が父親の当時の日誌、手記、書簡などをまとめて『米国開教日誌』として出版しているが、表題とは裏腹に大半が滞欧日誌とインド紀行に関するもので、米国での記録は全体の 2 割ほどしかない<sup>28)</sup>。米国関連の日誌によると、蘭田等がハワイ経由でサンフランシスコ（桑港）についたのが 1989（明治 32）年 9 月 2 日である。横浜を出帆して、ほぼ 2 週間の旅であった。ポーク街（807 Polk street）に 3 階建のかなり大きな住居を借り受け「本願寺出張所」とし、出張所開場式を挙行している<sup>29)</sup>。着任直後、蘭田が故郷の自坊総代世話人宛に出した書簡に「出張所の開場式も中々盛大にて、領事館の役人、東洋汽船会社の支配人、当地新聞記者を始め、百人程の来賓有之候」と書かれている。当地での開教活動がこの建物を拠点に始まる。10 月 7 日（土曜日）、同 8 日（日曜日）には、その後恒例になる毎週末の法話、説教を始めている。さらに、同じ総代世話人宛の書簡で、ホテル滞在中に「当地の英字新聞“クロニクル”の記者訪ね参り、小生供の来意、仏教の大意を相尋ね申候。之を先月 12 日の新聞に載せ候。又其翌日写真屋を連れて参り、法衣を着せし処を写させ呉れとの事に付差許候処、13 日の新聞に右写真を掲げ候。右二枚供自坊迄届け置候条御一覽可被下候」と書き送っている<sup>30)</sup>。当時の「クロニクル」(*San Francisco Chronicle*)を調べると、*MISSIONARIES OF THE BUDDHIST FAITH: Two Representatives of the Ancient Greed Are in San Francisco to Proselyte* という見出しで次のように報道されていた<sup>31)</sup>。

Two Buddhist priests from Japan, Dr. Shuye Sonoda and the Rev. Kakuryo Nishijima, have come to San Francisco to minister to the spiritual wants of their countrymen and at the same time to undertake the work of converting the Christians of this city to their faith. On Wednesday they will open a Buddhist mission at 807 Polk street. Here religious services will be held every Sabbath, for they are willing to conform to the national day of worship, and from this as a center it is proposed to circulate printed tracts which shall set forth the merits and beauties of the ancient Buddhist faith, as compared to the doctrines of Christianity. (下線は筆者による)

クロニクルの報道では藺田らの「来意」は「日本からの信者の信仰上の要請に応じて伝道を行う」とともに「キリスト教徒をも仏教に改心させる任務をおって」来たと伝えられている。平野に請われて宮本と一緒に事前の視察に派遣された本田恵隆の「開教事業の端緒」と題する挨拶が『桑港仏教会 30 年記念誌』に掲載されているが、その中で、本田はシアトルの領事館を訪ねた時のことを次のように回顧している。領事（斎藤）は「極めて不機嫌な顔をして、米国は異教徒の来ることを許しているのか知らぬと言いつら書類を調べたり、又は折角日米間が順調に進んで居る今日、異教徒である仏教を広めて厄介千万な問題が起りかはしないだろうか」などこの事業に「不快感」を示し、まるで厄介者扱いであった<sup>32)</sup>。本田はさらに、本願寺内部でも予算の面や「失敗ですると、世間の物笑にもなる」といった心配から、米国開教案が一旦本願寺の教学参議部会議で否決されかかったが、「開教」の名を改めて、「桑港に開教師を派遣する」とする折衷案で了解が得られ、予算もおりたことを明かしている<sup>33)</sup>。そもそも、西本願寺の米国進出は教団側としては「開教」というよりあくまで「先祖代々仏教徒である在米日本人を背景」として「吉事にも凶事にも仏教の教義を必要とし、又仏教の説教に耳を傾けやうとする日本人社会」の要請に応え、国内での布教活動の延長といった意味合いでの開教師派遣であったわけで、当地での報道にあるような「キリスト教徒をも仏教に改心させる」意図はまったくなかったと言える<sup>34)</sup>。

このような海外移民地での宗教事情のもとで、藺田らの布教活動が始まった。毎土曜日の説教は会員だけを対象として真宗の安心、弥陀の慈悲を説き、日曜日は一般の傍聴者も受け入れ、通常の説教をしている。布教活動を始めるにあたって、先に引用した「クロニクル」で、藺田はサンフランシスコでの開教師としての意気込みを次のように語っている。

“Our primary object is to instruct the Japanese who are here,” he said earnestly, “but that is not our goal, but merely a preliminary step . . . Our plan here is first to establish a church, then an evening school for our own people, and as we become more proficient in English, to communicate with those among Americans who wish to investigate Buddhism.”

本山の意向はどうかであれ、藺田らにとってはいささか控えめではあるがアメリカ人を対象とした開教の意気込みが読み取れる。藺田は書簡で、「西洋人も追々尋ね参り候に付、これは月曜日に法話する事に致居候」に加えて、「英語の法話致居候へ供、余り人数多く相成候に付説教に相改め候。其以来毎日曜の昼は外国人への英語説教致、夜は日本人への説教、毎土曜日の晩には . . . 少しも暇無之候 . . . 段々繁盛に相成候て、英語の諸新聞に評判と有成候」と、地元アメリカ人を対象とした布教活動の手応えを伝えている。やがて「仏教青年会」を始めアメリ



カ人を中心とする仏教会も組織され、法話や説教などに加え、日本語と英語の両方で機関誌が発行されるなど、徐々に活動も広がって行く。その多忙さを、蘭田の後任として渡米した水月哲英は「毎日曜の晩の講話、毎夜の夜学校教授、定期の婦人講話会、毎日曜午前の対白人講話、毎水曜夜の白人輪読研究会、毎月発行の雑誌の原稿作業、さて又労働口の周旋、其他依託さるる雑務も少なからず」と回顧している<sup>35)</sup>。

この時期、このような仏教のアメリカ進出に対する現地の反応を知る上で、当時の新聞報道の調査も役立つ。数紙の見出しをあげておく。

- BUDDHIST PROPAGANDA (*The Hawaiian Star*, September 19, 1899)
- TO TEACH BUDDHISM (*The Indianapolis Journal*, September 25, 1899)
- TWO PRIESTS FROM JAPAN OPEN A MISSION IN SAN FRANCISCO  
PRIESTS OF BUDDHA TALK: THEY DESURE TO ESTABLISH A TEMPLE OF  
THAT FAITH IN THIS CITY (*The San Francisco call*, November 13, 1899)
- BUDDHIST PRIESTS WHO HAVE COME TO SAN FRANCISCO TO MAKE US  
ALL BELIEVERS IN THE KHARA: WE HAVE SENT MISSIONARIES  
ABOROAD TO CONVERT THE HEATHERN AND NOW THE HEATHERN  
SENDS MISSIONARIES TO CONVERT US (*The San Francisco call.*, December  
10, 1899)

*Honolulu Republica* に掲載された *JAPAN SENDS HER FIRST BUDDHIST MISSIONARY TO CONVERT AMERICA* という記事はすでに蘭田がアメリカを去った1901年の8月に掲載されたもので、それまでに報道されたいくつかの記事に基づいていると考えられるが、日本における本願寺派の説明から蘭田らのカリフォルニアでの奮闘ぶりが紹介されていて、興味深い。多少細かい点で蘭田の日記や書簡での説明と異なる部分もある。同紙は蘭田らの到着について次のように報じている。「人目をひく僧衣を身にまとった2人の日本人の僧 (Monto priests) がサンフランシスコのダウンタウンのホテルに現れたのは1889年9月のある午後のことであった。2人は初代の開教使として派遣された蘭田宗恵と助開教使の西島覚了であった。数日後にはサンフランシスコの住宅街の真ん中にある2階建の建物で日本を出て最初の仏教の伝道会が開かれた」<sup>36)</sup>。ちょうど「本願寺出張所」開設に至る時期である。到着当初の熱狂的な歓迎ムードも次第に萎えるなか、それでも着実に伝道活動の成果があがっていく。この様子が、次のように報じられている。

新聞には他の宗教関連の掲示欄に混じって、「宗教哲学に興味のある方来場歓迎。週2回

伝道出張所にて真宗 (true faith) の教義、儀式についての講釈を実施」とやや控えめな勧誘文句が載り始める。最初はサンフランシスコ在住の日本人以外はほとんどこの新参の2人に気も止めなかったし、新聞記者だけが少々注目を払っていたという有様だった。しかし新聞記者の興味も程なく冷めやって、何もなかったかのような静かな時が過ぎていった。このように地道な活動ではあったが、伝統的な日本の習慣と一緒に仏教も捨て去っていた在米日本人を目覚めさせるには十分であった。白人を勧誘したり改宗させようといった、目に見える積極的な努力はなされなかったが、それにもかかわらず伝道出張所を訪れる白人もじょじょに現れてきた。中には東洋の神智学や神秘主義に惹かれて訪れるものもあつたり、また単に知的な目新しさだけから来る白人もいたが、稀に信仰上の向上を求めてやってくる白人もいた。結果的に前者は去り、後者は残った。2人の開教使がアメリカの地を踏んで7ヶ月後白人信者による「三宝興隆会」(Dharma-Sangha of Buddha) が結成された。

藺田も書簡に「外国人の方も追々繁盛にて、日曜説教の他に毎木曜日に法話会を開く事と相成り」と記しているように、在米日本人以外の参加者も期待以上に増えていったようで<sup>37)</sup>、この「三宝興隆会」の設立もある意味画期的な出来事で、次第に在米日本人以外の現地の信者も交えて、アメリカでの開教活動が進むことになる<sup>38)</sup>。ただこの「三宝興隆会」の設立事情については宗恵の日記にも詳しい記述はなく、数カ所「三宝興隆会のビジネス・ミーティングを開く」という短いメモがあるだけである。補足として編者の藺田香勲が短い注をつけている<sup>39)</sup>。そこには、この会は「在留邦人に対する伝道に止まらずして広く白人にも法の光を宣布せんが為の教会組織であつて……仏陀の教に関心と興味を有するすべての人を会員として迎え入れる。宗教的組織のみならず、教育的、慈善的設備の経営、書籍、定期刊行物の発刊などの事業をもなさんことを期待する」とある。現在浄土真宗本願寺派では国際センターを中心に開教使養成の講座を開くとともに17の国と地域で国際伝道活動が展開されているが、その礎がこの時期に築かれたとも言える。ただ三宝興隆会の設立時期については諸説あり、香勲は「4月8日に始めて組織され、7月27日には加州法律の下に法人として認可された」と記しているが、*Honolulu Republica* の記事では「2人の開教使がアメリカの地を踏んで7ヶ月後に会が結成され、2ヶ月後の6月に加州法律の下に法人として認可」と記されている。また他の新聞では“Buddhist Church Incorporated”(「仏教教会法人化さる」)という見出しで直接会の設立が報道されていて、それによれば5月29日に認可を受けていることになっている<sup>40)</sup>。「桑港仏教会30年記念誌」の沿革史では、「白人の仏教研究者逐次増加し33年1月4日白人仏教会の発会式を挙ぐるに至れる。同年4月16日藺田宗恵師及びノーマン博士その他白人求道者十数名の発起にて、三宝興隆会(ダルマ・サンガ・ブッダ)を設立してアメリカン仏教会を創

152 (762)

設するに至れり。同年5月26日三宝興隆会は加州々庁より公認せらるる」となっている。何れにせよここにカリフォルニア州の公認法人としての活動が始まったわけである。スタート時の法人は開教師の蘭田を会長に J. R. Guelph Norman が副会長をつとめ、Kathleen Melvena McIntire、Jenny Ward Hays、Charles Frank Jones、Eliza R. H. Stoddard、Agnes White の各氏が評議員の任についた。在留邦人を対象とした「内地流」の布教から現地の人々を対象とした「開教」の始まりを告げる出来事ともいえよう。このような蘭田らの活動や三宝興隆会が結成されたことについて、ある現地の新聞では *A Buddhist Church in America* という見出しで、次のような「懸念」も報じられている。

A Buddhist church has now been established in San Francisco and Prof. Guelph-Norman, who is responsible for the new church, says he was sent to the United States by a Burmese high priest "in anticipation of a general Buddhistic movement." Is all this foolishness nothing but a fad that will live for a few days, or is it a sign of a step backward by our people? The new Buddhist organization in San Francisco is to be known as "Dharma-Sangha-Buddham," which translated means the "Order of the Excellent Law of Buddha." It is to be more than a church, and a secret order having a number of degrees, including the "Circle of Light," is one of the main features.

(*Virginian-pilot*, June 10, 1900)

このように始まったカリフォルニアでの布教、開教活動であるが、1900年10月蘭田は突然ドイツ伯林駐在を命じる辞令を受け取る。在米開教を始めてちょうど一年である。名目はヨーロッパの社会宗教事情調査であったが、ちょうど前年から新法主大谷光瑞師がロンドンに留学中で、優秀な蘭田が現地での随行役に選ばれたのであろう。1902（明治35）年10月までベルリンで仏教研究を行いながら大谷光瑞新門に随いてヨーロッパ各地を歴訪している。大谷光瑞師はそのあと有名な西域踏査にのりだし、蘭田もインド西域各地の仏跡踏査に加わることになる。蘭田がヨーロッパに立った後そのまま米国に残った西島や後任の開教使等を中心に、布教活動が続けられた。まもなく西島等の編集による英文雑誌 *Light of Dharma* の発刊も始まることになる。

蘭田がベルリンに赴任するほぼ半年前には近角常観が池山栄吉とともにベルリンに行っている。次の年には近角や蘭田らベルリン在住者によって「ベルリンの花まつり」が挙行されたりし、互いに親しく付き合っていたが、近角が欧州に向かう途中でアメリカを訪問した時には、2人は会う機会はなかったようである<sup>41)</sup>。近角は視察中『政教時報』に「米国の宗教事情」としてキリスト教の活動などについて報告記を書き送っていたが、サンフランシスコの仏教会に

ついでに報告はみあたらない。『政教時報』を見ると、「桑港仏教会より6月15日発行の会報に同氏（近角常観）に関し左の如く記載された」との「会報」が掲載されていて、

欧米宗教視察の途に上られたる、大日本仏教青年会幹事近角学士はボストンより一書を寄せて、事情の許さざる為め桑港に立寄り、親しく海外伝道の真相を見聞せざりしを遺憾とし、猶今後相提携して仏教の為に盡竭せんことを申越されたり

と報じている<sup>42)</sup>。近角から米国での仏教事情についての報告が聞けなかったのは残念である。一方、菌田の突然の離米について「桑港仏教会沿革史」には、「12月、本会会長菌田宗恵氏渡欧の為め辞任せらる。師は在任中創業の苦難と戦ひ、漸くにして外人伝道の道を開くにいたりしと雖、未だ師が当初の理想を実現するに至らずして辞任せられ本会会員の失望其極に達す」とある<sup>43)</sup>。

## 5 仏教東漸と菌田宗恵の決意

桑港仏教会会堂一階の正面には大谷尊由揮毫による「佛教東漸」の扁額が掲げられていた<sup>44)</sup>。アメリカの仏教徒にとっては、自分やその先祖たちによって太平洋をこえて仏智と慈悲がもたらされたということは格別の意味があり、開教記念式典では必ずと言っていいほど挨拶や回顧談で耳にする文句でもあった。しかしながら、菌田にとってはこの「佛教東漸」という言葉は、一般仏教徒以上に、さらに深い意味を持っていたと思われる。それは単に初代開教師としてアメリカ本土の地を踏んだというだけではなく、思いは日本、中国から、釈尊誕生の地インドにまで馳せていたからである。

日本の仏教は聖徳太子から始まったとも言われるように、日本の仏教受容の功績は聖徳太子におうところが大きい。親鸞聖人も正信偈で「印度西天之論家／中夏日域之高僧」と三国七高僧の功績を紹介しながら、日本に仏教が届けられた道筋を詠まれているが、なぜか正信偈には太子の名前は見られない。しかしながら、晩年には親鸞聖人は多くの聖徳奉讃の和讃を作り「太子は是西方の本地阿弥陀仏にて座す。太子は和国の教主、日本の釈尊なり」と言い切っておられる。聖徳太子の評価は江戸時代になると一変し、儒学者や国学者から強い批判を浴びることになり、一時人物像も歪められたが、明治になると再び太子の業績、人物像の見直しが始まる。その口火を切ったのが菌田宗恵の聖徳太子に関する論文、著書であった。1894（明治27）年には先にも触れた『反省会雑誌』に「聖徳太子伝記の選択につき」という論評を掲載し、翌年には『聖徳太子』を著し、これによって新たな視点から太子研究が始まることになる<sup>45)</sup>。明治に入ると、日本でしっかり根付いた仏教も、日本にとどまらず、日本こそ「大乘相應の地」

として満足していた仏教者には想像もできなかった「太平洋」横断による、さらなる仏教東漸が始まることになる。

蘭田にとっての「佛教東漸」を考える場合、太子以外にもうひとり大切な人物がいた。玄奘三蔵であった。よく知られるように、釈迦なき後仏教は広く四方に広まったが、伝播経路としてはインドからセイロン（現スリランカ）を経て東南アジアに広まった、いわゆる南伝の原始（根本）仏教と、インドから西域を経て中国に伝播し、さらに朝鮮半島を経て東辺の日本にきた北伝の大乗仏教の二つの流れがある。特に北伝仏教の東漸には、インドから中国へ多くの経典や仏像を中国へ持ち帰り翻訳した玄奘三蔵によるところが大きい。実は蘭田宗恵は東京高等学校の学生時代に、イギリス人でインド仏跡の考古学的踏査研究の父とも目されるカニンガム（Alexander Cunningham）の『玄奘師旅行記』の翻訳を發表している<sup>46)</sup>。このように、玄奘三蔵や聖徳太子といった、仏教東漸に功績のあった人物に関する業績を早くから残している蘭田にとって、さらなる仏教の東漸に多少とも自分が関わったということに関しては、ある種の達成感や自負心があったに違いない。

このような脈絡のもとで、蘭田にとってはもう一つどうしても確かめたいことがあったと考えられる。それは、19世紀になって、特にヨーロッパで盛んになった仏教研究や文化人類学などの分野でしばしば話題になることがあった、中国の古代史書に書かれた中国仏教僧のアメリカ大陸布教の旅についての話である。この話は『梁書』という唐の時代に南朝梁について書かれた正史に登場し、ここに記載された扶桑国という仏教僧が訪れた地が一体どこであったのか議論がかわされていたが、一説に、その地はメキシコであったにちがいないというものがあつた。

ヨーロッパに仏教が知られるようになるのはセイロン（現スリランカ）島に伝わる南伝一切経がヨーロッパに知られてからである。セイロンに伝わった南伝仏教の経典は、ヨーロッパのパーリー語やサンスクリット語などの研究者によって持ち帰られ、やがてインド学や仏教学が創設され、急速に研究が進むことになる。明治期多くの日本人研究者がマックス・ミュラー（Max Müller）やオルデンベルグ（H. Oldenberg）などのもとで学んだ。アメリカからドイツに渡った蘭田もベルリン大学で講義を聴講している<sup>47)</sup>。ヨーロッパでは、やがてインドの仏典研究に加え、漢訳の仏典研究やインド、西域の仏跡発掘や考古学的な調査も積極的に行われるようになった。『梁書』にある中国仏教僧のアメリカ大陸布教についての論争がみられたのも、事実であれば、コロンブスの大陸発見よりも千年も遡る時代にすでにアジアから仏教僧が海を越えてアメリカに渡っていたことになり、歴史を大きく変えることにもなったからである。

この論争については、かなり早くに日本でも紹介されている。蘭田は先に見たように、学生時代から欧米での仏教関連の研究に関心が強く、多くの海外の文献を読んでいる。当然この中国僧のアメリカ布教についての論文にも精通していたと考えられるが、実はちょうど蘭田が東

京帝大入学直後の1890（明治23）年に「亜米利加州古代の仏教徒の事」という論説が、先にも触れた西本願寺海外宣教会から発行された『海外仏教事情 第13集』に掲載されている。この論文では、ヨーロッパでの研究成果が紹介され、5世紀に仏教僧がアラスカからメキシコまで西海岸に沿ってアメリカ大陸に足を踏み入れ、各地で高度な文化を伝えたことを支持する証拠が列挙されていた。身近な機関紙に掲載された記事で、当然藺田も読んだはずである。この話題は多分一般的な話題としても藺田の興味を引いたに違いないが、特に自身が開教師としてアメリカ大陸に赴くことになった時には、自分たちよりずっと昔にすでに仏教僧がこの地を訪れ、布教を始めていた可能性があることは、是非とも現地で確かめたいと思う気持ちを強くしたのではないかと考えられる。これが、次の視察地であるヨーロッパへ旅立つ慌ただしい時期に、あえてメキシコ旅行を敢行した動機になったにちがいがなかった。

## 6 藺田宗恵のメキシコ踏査旅行：フーサン（扶桑）とホイセン

藺田がヨーロッパ赴任のためサンフランシスコを去ったのは1900年12月のことで、開教使青年会員 Norman、McIntire らに見送られ、アメリカを横断し、ニューヨークからロンドンへ向かっている。メキシコ旅行はその1ヶ月前に行われた。3週間にも満たないメキシコ踏査旅行であったが、アメリカの新聞では大きな成果があったと報じられた。

ちょうど藺田がメキシコシティから遺跡のあるミトラへの旅に出かけた時期にテキサス州のエルパソで発行された新聞 *El Paso Daily Herald* が “To Study Aztec” との見出しで、藺田がメキシコに向けて出発したことを報じている<sup>48)</sup>。

S. Sonoda, a Japanese Buddhist from the college in San Francisco has gone to the City of Mexico for the purpose of studying the Aztec language in relation to its similarity to oriental languages and compare Aztec religion with that of Buddhism and other eastern religions. Mr. Sonoda will meet Senor Leopold Batres, probably the best informed man on the subject in Mexico. The two men will discuss the matter and Mr. Sonoda will be afforded every facility possible for pursuing his investigations.

まずこの記事では、藺田の旅の目的としてアズテク言語とアズテクの宗教を特にアジアの諸言語やアズテクの宗教との類似に注目して比較対照研究することが挙げられている。宗教はともかく、藺田は言語学者でもないし、ましてこのような短期間に言語や宗教の比較研究など十分に行うことなど不可能に近い。従って、言語研究と言っても、多分「文字」など記号類の類似性などに関する調査であろうし、宗教比較についても、おそらく関連する建物、施設、壁画な

どに残された仏教関連の遺跡調査に限られよう。

藺田香勲が編集した『藺田宗恵米国開教日誌』にはこのメキシコ旅行についても米国編として「メキシコ旅行抄」が含まれているが、あまり資料が残されていないこともあって、編者香勲が補足的に注釈をつけている。メキシコ旅行の動機について藺田香勲は次のように書いている。少々長くなるが、ほぼ全文を引用しておく<sup>49)</sup>。

メキシコを旅行して古マヤ文化、乃至はそれを継承したアズテック文化の遺跡を探ることは父のかねてからの念願であったと思われる。コロンブスのアメリカ発見に先立つこと千余年、メキシコはユーカタン地方を中心として栄えたこの絢爛たる太古文化が、余りにも突如として出現し、他の古文化の実例に徴すれば少なくとも千年を要する奇跡的發展を忽ちにして見せ、かつその前の文化との有機的連絡を欠いているため、今日でも多くの学者はこれを土着にあらざる外来の文化と解しているのであるが、この当時欧州の宗教学者、仏教学者の中に同文化がアジアからきたもの、しかも仏教の伝道僧がもたらしたものであるとの説をなすものがあつた。すなわちその頃欧州に翻訳された中国の一古書に、Hoeishin という名前の中亜の一比丘が Fu-Sang 国に漂着して同地に伝道した物語が載っているが、この Fu-Sang 国は同書の記述によれば気候風土自然等全くメキシコに髣髴たりというのであって、現存のマヤ＝アズテック文化の遺跡について、その中の仏教的要素の数かずを指摘せんとするのである。—この説の当否を实地に踏査せんというのが父の念願であつたのである。

この香勲のコメントは先に引用した *El Paso Daily Herald* をはじめいくつかの新聞記事とかなり似ている。筆者の知る限り藺田宗恵がこのような考古学的な話題について書いたものを知らないし、ひょっとすると、香勲も新聞などの説明を参考にコメントを記したのではないかと推測できる。

香勲のコメントにもあるが、新聞報道では藺田は「シン、ホーエイと言へる日本僧侶の記述せる記録に従うて探検をなしたるに」(Sonoda followed the chronicles of Hoei Shin, a Buddhist monk) とあるように、シン、ホーエイの追跡を目指した。シン、ホーエイの書いたとされる記録とはどのようなものであったのか。前掲書「亜米利加州古代の仏教徒の事」には扶桑とそこを訪れた僧侶について次のように記されている。まず、「中央亜米利加及びメキシコ住居せる土人の中に一般に言ひ伝へたる一の口碑あり 云く往古其土に来て教法及び技術を伝へたるものあり 其人は長衣を着し鬚鬚を蓄へたる白色の人にて其容貌服装全く土人に異りし」「是れ何人なりしや又其人は何処より其土に來りしや」と先住民に伝わりる口伝に関する問いを提示している。そして、この「口碑」を裏付けする「記録」について、「支那にリ

ヤンシューと云へる古書あり フーサン（扶桑）と称する国のことを記せり 此書は紀元第7世紀の著なり 此扶桑と称する国は支那の東方に位せるものにて紀元458年に方って仏法の伝教師此国に向って出発し其土人に正法を宣伝せりと云ふ」とある。そして「正法を宣伝せり」に関して、「リヤンシューに曰く扶桑の人民もと無識蒙昧にして曾て仏道の何者たるを知らざりしが〔ラン〕朝の世〔タミン〕2年に嘗〔紀元458年〕キピン国〔カブウル国〕<sup>ビキユー</sup>の比丘5人該地に向かつて出発し其人民に教ふるに仏戒を以てし之に経像を伝え又之に勧むるに出家学道を以てし大いに其随習を改良したりと云々と、続く。この比丘5人の一人がホイシンと呼ばれる僧であった。「ホイシン」は『政教時報』の記事で「シン、ホーエイ」と記載されている人物で、他にも「ホイセン」と表記されることがある。英語では *Hoei Shin*、*Hui Shen*、*Hwui Shan*、などと記される<sup>50)</sup>（以下「ホイセン」の呼称を使う）。「リヤンシュー」は中国の古代史書『梁書』で、そこではホイセンは「慧深」として登場する。この一行5人がアフガニスタンより「メキシコ及びセントラルアメリカ（中央アメリカ国）」に向かったわけである。ヨーロッパやアジアとアメリカ大陸との往来については民間レベルでは古代から交易や冒険などを通して行われていたことが多くの論文で指摘されている。特にアジアからはベーリング海峡経由での交通往来について、航海技術や古代地図の分析などから検証されていて、この旅がまったくの架空の話ではないことが示召されている<sup>51)</sup>。

この扶桑（Fu Sang）については、神話の中の伝説上の場所なのかそれとも実在する場所なのかについての論争が古くからあり、中国では一般的には扶桑といえば日本をさす異名として知られていたし、日本でも『山海経』の神話に基づいて平田篤胤や荻生徂徠らの国学者を中心に扶桑が日本の異称であるとの説が広がった<sup>52)</sup>。『政教時報』では「今の墨其西哥と同意義なる海を隔てたる土地」とだけしか記述はなく、「扶桑」の固有名詞が使われていないが、その理由は定かではない<sup>53)</sup>。

この扶桑メキシコ説はちょうど蘭田がメキシコ探査を行った年に出版された高橋龍雄著『大日本国語考』でも言及されているし<sup>54)</sup> アメリカでも C. G. Leland や E. P. Vining によるなど大著が出版されていて、詳細にその可能性が検証されている<sup>55)</sup>。従って、『政教時報』やその情報源であるウエストミンスター・ガゼット新聞の報道の目新しさは「ホイセンは日本僧で日本人が米国を発見した」という新説にあり、さらには、この証拠を当時在米中の日本の蘭田という仏教僧がメキシコへ出かけ新たにその証拠を見つけたという点にある。例えば、*The Richmond Dispatch* や *The Houston Daily Post* 紙では次のように報道されている<sup>56)</sup>。

Some months ago we were told that new discoveries had been made both on this continent and in China, which left little, if any, doubt of the correctness of the old theory that the Chinese landed over here long before Columbus, and impressed their



civilization upon the country. Now, however, Japan comes forward in the person of a Buddhist priest and seeks, to say the least, to divide the honor with the Flowery Kingdom.

『政教時報』の出典となったウエストミンスター・ガゼット新聞とは多少異なる見出しと記事内容になっているものの、この記事はアメリカの数紙に配信され、報道されている<sup>57)</sup>。上にあげた *The Richmond Dispatch* や *The Houston Daily Post* 紙の報道では見出しは “Who Discovered Us?” となっていたが、その他数紙から見出しをリストアップすると、*Japanese Finders of America*、*Columbus Came Very Late*、*A Buddhist Columbus*、*Discovery of America*、*After Columbus' Laurels*、*Japs Found Us*、*El Descubrimiento de America*、などが見られる。数紙の記事では「Fu Sang がメキシコであるというのは蘭田の見解」と報じられているが、先にふれた理由から正確には「蘭田もこの説を支持している」くらいに止めるべきであった<sup>58)</sup>。

蘭田が “Fu Sang” がメキシコであると考えた証拠として報道では “because of the maguey plant” と植物の名前が挙げられている。ホイセンの記録には「扶桑国は大漢国の東二万余里、中国の東方にある。扶桑の木が多いことからその名がある」と書かれている。この植物こそが扶桑木、*maguey* である<sup>59)</sup>。蘭田がメキシコ旅行の車中で「此辺沿道一般に<sup>マゲイ</sup>竜舌蘭を植うること盛んなり」と観察している植物である<sup>60)</sup>。古代メキシコでは俗にインディアン桑と呼ばれていたものである。メキシコ産とアジア産とは同名同種と考えられている。扶桑メキシコ説では「扶桑国は大漢国の東二万余里」といった地理的記述の考証に加えて<sup>61)</sup>、扶桑木をはじめとするアメリカ北西部の顕花植物と東アジアとの共通点やそれから作られる同時代の使用品についての調査研究が仮説妥当性をめぐる論争の一つの焦点となっている<sup>62)</sup>。

この他に蘭田の発見に関して報道されたのが「墨其西哥中佛教の勢の及べる多数の証拠」を見つけたというニュースである。これは蘭田にとって佛教東漸の事実や歴史に関わることで、メキシコ探査の核心であったに違いない。冒頭で引用した『政教時報』にも「其重なるものは墨其西哥の十二支十八宿、・・・」などいくつかの証拠が挙げられているが、列挙されている具体例は先にあげた Leland、Vining らがすでに詳細に調査、検証しているもので、特に蘭田が見つけたと断定できるものはない<sup>63)</sup>。そもそも蘭田のメキシコでの調査は実質1週間たらずで、目的とした遺跡には到着できず、この旅行でどれほどの「新発見」ができたのかについては、当地の新聞の論調とは異なり、かなり否定的な予測にならざるを得ない。また注目すべきは、これらの「証拠には」東洋文化の影響が見られるにせよ「日本僧」が関わっていたと結論づける根拠がまったく見当たらないことである。そもそも5世紀といえばまだ日本に公式には仏教が伝来していない時期である。したがって、蘭田が言ったとされる「日本人僧によるアメリカ

大陸発見」については、なんら具体的な根拠が見当たらない。報道では「園田は此発見に対し一書を著わし、日本人が米国を発見した事実を科学界に証示する見込みなり」と結ばれていて、また『政教時報』の同じ号の「紛々録」欄でも「米国の発見者は日本人なりと言うとは『世界における日本人』の著者渡邊修二郎氏も曾て爾か言いしことありしと思う。我等は早くも園田氏の正確なる考証に接せんことを望む」と要望も出されているが、園田が帰国後この件に関して何か公表した形跡も見当たらず、今となっては「正確なる考証」について知るすべがない。

そのメキシコへは『園田宗恵米国開教日誌』によれば1889年11月19日に到着している。「夜8時首都メキシコ着」とある。ここから実際に現地の遺跡調査に向かうのは1週間後の27日である。その間園田は日本の公使館や前駐日墨公使の Wolheim 氏と会見し、新聞報道にもある「バトルス氏」(Senor Leopold Batres) の紹介を受けている<sup>64</sup>)。Batres はメキシコでは有名な考古学者で、園田は現地へ赴くまで彼と一緒に食事をしたり、博物館で説明を受けたり、近くのチャプルテペック城を訪れたりしている。これを見ると、園田の旅は全く個人的なものではなく、ある程度公的な意味合いを持っていたとみなせる。

27日いよいよ探査旅行に出発する。「現存のマヤ=アズテック文化の遺跡について、その中の仏教的要素の数かずを指摘せん」ための目的地はミトラ (Mitla) で、この廃墟の調査であった。ミトラのあるオアハカ地方はマヤ=アズテック文化の遺跡としては比較的太平洋沿岸に近く、ホセインらが訪れたとすればアラスカから西海岸沿いであったためでもあろう。「メキシコ旅行抄」には、旅行記からこのミトラ行の部分が紛失し、わずかな抄録しかないのが、肝心の探査については全くわからない、とある。まず朝鉄道でプエブラ (Puebla) に向かっている。「サン・ホアンテオティワカン (San Juan Teotihuacan) に近づけば左方にこのピラミッドを認む。いわゆる日月の両ピラミッドなり」と車中からの観察を記している。この地域は古典期にいわゆるテオティワカン文化が栄えたところで、両ピラミッドはその遺跡として有名である。先に触れた考古学者 L. Batres 氏はピラミッド復元作業の指揮官を務めていたこともあり、この調査で得た多くの情報は彼からのものである可能性が高い。園田は「その調査は之を帰途に保留する」と日記に書いていて、実際12月4日帰米途中にこの遺跡を訪れている。次いで、アピザコ (Apizaco) からプエブロ支線でプエブロ (Pueblo) へ。先にフーサン説に関連して述べた植物に関してここで「此辺沿道一般に竜舌蘭<sup>マゲイ</sup>を植うることに盛んなり。メキシコ人の愛用酒プルケは之より採るなり」と観察している。プエブロから Cholula (Cholula) に足を伸ばし、メキシコ最古最大のピラミッドを調査。ただし、ここまでがほぼ1日の行程である。翌日いよいよ目的のミトラ遺跡へ向かう。11月28日のことである。サン・アントニオよりクエズ峡谷に入り、トメリン駅を経てオハカ (Oaxaca) 着。ここで一泊し翌29日四人乗りの馬車 (騾馬) で、他の同乗者と一緒に、La Colura を経て、ミトラへ。ところが日誌には「途上の所見」が多少残されているものの肝心のミトラでの探査については欠落していて具体的な調査内容につ

いてはわからない。ということで、翌日帰路オハカ（Oaxaca）へ行き12月2日再びプエブロ経由でメキシコ（メヒコ）へ。メヒコに帰ると翌日はプエブラに向かう車中から見たピラミッドのあるサン・ホアン・テオティワカンへ出向いている。翌日帰米の途中でツーラ（Tula）に立ち寄りアズテク文化の基礎を作ったとされる先住民族トルテック（Toltec）族の廃墟の探査を行っている<sup>65</sup>）。三日がかりでメキシコ国境までたどり着き、リオグランデ川を渡り、エルパソからサンフランシスコへ向かっている。

結局宗恵が旅したのはいわゆるオルメカ文化を継承したメソアメリカと呼ばれるメキシコ高原中央盆地およびオアハカ地域で、特にメキシコ、プエブロ両盆地で栄えた古典期テオティワカン文化遺跡の調査ということが出来る。この高原地域はすでに西暦紀元前から多くの文明が衰退を繰り返して、8世紀末に最盛期を迎えたユカタン半島のマヤ文明やトゥーラを中心とした文化、またアステカ文化にも大きな影響を与えた。この文明は特に壮大な宮殿やピラミッドを建設し、絵画、壁画、彫刻、装身具など数多くの発明をなした。そこにアジア、特に仏教関連の影響の痕跡を発見し、この文化発展にアジア人が寄与したことの説がヨーロッパの宗教学者、仏教学者の間で有り、蘭田もその説に同意していたようで、実際になんらかの確証を得たかとの思いでヨーロッパへ渡る直前に20日ほどを割いての慌ただしい旅行を敢行した。それにしても、具体的な調査報告関連の記録が全く残されていないので、どのような証拠を持ち帰ったのか成果の評価ができないのは残念である。ただ、蘭田がヨーロッパに移ってから本願寺の神根善雄氏宛てに出した書簡に「小生の知友レビー博士にも、久々の面会を遂げさせ戴き、且シャバン博士へ御紹介を忝ふし、米国出立の際実行したる、小生のメキシコ古跡探査に関する鄙見を述べ、博士より有益なる評論を聞き得候段、実に恐縮の外無之候」などとあることから<sup>66</sup>）、何か自論を証する証拠を見つけていた可能性もある。

このような仏教布教者の活動も、キリスト教のように強大な教会などの組織をバックにしたものではなく、かなり小規模なもので、またそれほど強引な布教ではなかったにも関わらず、仏教は非常に広い地域に伝えられた。これにはいくつかの理由が考えられるが、一つには仏教自体の特性も重要な要因と考えられる。最後に、この観点から仏教東漸を振りかえる。

## 7 おわりに

先に、サンフランシスコなどに伝道所を開設し、在米日本人信者や当地の信者を前に忙しい日々を送っているはずの蘭田が、それもヨーロッパに旅立つ慌ただしい時期に、わざわざメキシコに出向いた理由を中心に蘭田の「東方移動」について考察した。このメキシコ探訪は調査というにはあまりにも短く、また蘭田自身による具体的な調査報告も見当たらないことから、報道にあるような成果が本当にあったのかという疑念も起こる。

蘭田はアメリカを去ってから1年と10ヶ月ほどベルリンを中心にヨーロッパに滞在した後、今度は光瑞新門主からインド仏蹟巡拝の供を命じられ、本願寺探検隊の一員として、西域、インド踏査に加わることになる。これは1年をこえる本格的なインド、セイロン島の仏教遺蹟の調査となり、蘭田の仏教史についての知識の広さと調査力が実証された旅であった。特に学生時代から玄奘三蔵西域記を翻訳するなど、仏蹟についての知識の蓄積はあったものの、実際の調査でどれほど成果を上られるかは未知数であったが、その所在さえ見当もつかない中で仏教遺蹟を探查したわけで、インド踏査の詳細な日記や「仏蹟誌」を読むと、最初に抱いた「素人仕事では」という疑念が払拭される仕事ぶりである。最後は橋賞弥国コーサンビエを玄奘の西域記の記述を唯一の手がかりに「それらしき遺址を求めて遍く彷徨」したが、渡米からして、最終的にこれではほぼ世界を一巡りしたことになり、仏教東漸の歴史を思い起こすと、蘭田にとっては一層感慨深い結末であったと想像される。

先に、仏教僧ホイセン一行5人が5世紀にアフガニスタンより扶桑国(Fu Sang)のあるアメリカ大陸へ渡航していたという記録の証拠を列挙した「亜米利加州古代の仏教徒の事」を引用したが、実はこの論考にはもう一つヨーロッパの数人の仏教研究者による興味ある指摘が紹介されている。それは、仏教自体の特性に関するもので、仏教はこれまで様々な地域に伝播しているが、その様相をみると、仏教は伝播した国々の民族宗教を排除せず、それを本来の釈尊の教えに取り込み、時には融合しながら発展してきた。これこそ仏教の仏教たる所以である、というものである。曰く、

基督教及び回々教の未だ今日の如く其教域を世界の各地に弘張せざりし以前に在て、仏教は既に印度に於て其布教を開始し活発なる勢力を以て広く世界の各地に其教法を伝播せり。若し基督教及び回々教の如き反抗者出でて其運動を妨害することなかりせば、今日南北亜米利加州阿弗利加オーストラリア州及び其他南洋諸嶋の如きは其全分、若くば幾分仏教の感化に服せしや敢て疑を容れざる所なり。(6頁)

さらに、ヨーロッパの仏教研究者の説をいくつか引用して、「古来仏教徒の伝道における其精神の非常に旺盛なりしを証すべき許多の事実」を紹介している<sup>67)</sup>。例えば、仏教は平和的、折衷的、思想的で、力を用いて脅迫を行うことはなく、それぞれの民族の奉信する諸神を崇めてこれを仏陀の下に置くことで争いも起こらない。また、親愛平等仁慈の精神こそ仏教が活動する力で、この精神があるからこそインドを離れ遠く他国に流伝し、異教と調和して、周囲の事物に抗敵することはなかった<sup>68)</sup>。また仏教は信徒に対して貴賤の差別をせず、同胞兄弟と考え、其福音を天下万国に伝播しようとする宗教である。そのため仏陀の行いに倣って艱難辛苦をもろともせず、人種姓族を問題とせず、ただ三宝の道を未信の徒に伝えるため、世界の各

162 (772)

地を周遊するのである。加えて、先の扶桑メキシコ説、ホイセンについても言及し、「支那人の説に5人の僧扶桑に到て仏法を宣布し経像を伝え儀式を教え出家の法を立て大いに其民族を改新せり」とあるのは決して疑いの余地のない事実である、と結論づけている。

藪田は西本願寺から派遣された浄土真宗の開教師であったが、アメリカでは特定の宗派を超えた「仏教僧」と見なされたわけで、日本から移民した信者も当初は西本願寺の末寺を手次寺とする檀徒が多かったとはいえ、特に若者が多く、宗派に対するこだわりも少なかったこともあり<sup>69)</sup>、実際には様々な宗派の人々が仏陀（釈迦弥陀）の慈悲を求めて集った。本願寺出張所の同朋会の名称が「仏教会」や「三宝興隆会」であったことはこのことをよく表している。したがって、西本願寺の米国伝道が日本仏教の米国伝道であり、仏教東漸の歴史そのものであった。藪田はカリフォルニアで初代開教師としてその重責を果たし、さらに視察、研究にとヨーロッパへ向かい、ついには西域での仏跡踏査旅行を終え、長い海外生活の幕を閉じた<sup>70)</sup>。その間おこなったメキシコへの旅はほんの短い旅であったが、藪田にとっては仏教東漸を確認する、いろいろな思いが凝縮された充実した3週間であったに違いない。

## 注

- 1) 『政教時報』については、大阪教育大学の岩田文昭教授を研究代表者とする JSPS 科研費研究の一環として作成された DVD を利用した(研究課題番号 20520055)。この資料は「近角常観研究資料サイト」(<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/index.html>)でも閲覧できる。
- 2) 第 55 号、1901 (明治 34) 年 12 月 15 日、11 頁「社会欄」。
- 3) 明治 32 年 4 月。
- 4) 大日本仏教徒同盟会の会頭には公爵久我道久が推挙され、常務員として近角常観、秦敏之が選出されている。
- 5) 近角も当初は東京帝大を卒業直後のまだ 30 歳直前の若さであった。
- 6) 同盟会の綱領に、同会の事業方針の一つに「政府をして公認教の制度をたてしむること」という一項がある。キリスト教についても保守的な立場をとったが、闇雲に反対するのではなく、例えば仏教徒国民同盟会編で『耶蘇教非公認論』を出版するなど、西洋の宗教事情、史実などの根拠に基づいた議論を展開している。
- 7) キャプテン、プリンクリー (Francis Brinkley) が語ったとされる。当時の日米新聞社社長の我孫子久太郎による桑港仏教会開教 30 年記念会の挨拶から (『桑港仏教会開教 30 年記念誌』桑港仏教会文書部編、1930)。プリンクリーは 1867 年に来日し、そのまま日本にとどまったイギリスの陸軍士官で、1895 年 *The Times* の通信員に就き、日本についての多くの著書や辞書を刊行し、日本を世界に紹介し続けたジャーナリスト。日英同盟締結にも尽力したと言われている。通称「キャプテン」と親しまれていた。
- 8) 常観はキリスト教を仏教と同等の立場で統括するという宗教法案に猛烈に反対したが、『政教時報』創刊号の「寛大の気風」の中で、「予輩の基督教を論ずるは国家の宗教政策上よりするのみ、彼の政教混乱の弊を打破せんとするのみ、善良なる基督教徒に対して、何の悪意を有せん、仏教徒たるも

- のは、決して基督教徒を毛嫌ひすべからず、須らく寛大の精神を以てこれを善待すべし」と述べている。
- 9) 「第8回仏教夏期講習開設予告」『政教時報』第12号、1899(明治32)年7月、20頁。大日本仏教徒同盟会も近角常観が欧米視察に出かけると、『政教時報』の内容や活動にも影響が出た。例えば、久保猪之吉の書簡には「上野ニ大日本仏教青年会総会あり 小生も出席せり。兄がかへらねばダメのやうおもはれたり。モ少しオルガニゼーションせねば役に立ち申すまじ。」などとある。(求道会館所蔵の近角常観宛書簡、34年10月31日)『政教時報』については拙稿「近角常観の郷土における宗教活動とネットワーク(上)」(立命館大学『立命館国際研究』31巻2号、2018)参照。
  - 10) 帝大では、同じ時期にベルリンにいた芳賀矢一氏、藤代禎輔、松本文三郎、またロンドン在住の夏目漱石などと学友であった。
  - 11) 1881(明治14)年東本願寺は「真宗大谷派」、西本願寺は「真宗本願寺派」という宗派名になった。
  - 12) 現在でも龍谷大学紹介ではしばしば「浄土真宗の精神」に加えて「先進性」や「進取」といった伝統的な気風が強調されてる。
  - 13) 『反省会雑誌』は1892(明治25)年東京へ進出し『反省雑誌』と改題し、さらに1899(明治32)年に『中央公論』となった。現在『中央公論』は中央公論新社によって発行されている。また、当時反省会の会員数は2万人を超えたとされる。
  - 14) 次第に政治評論や文学評論また、小説などの割合が大きくなり、宗教色も薄れ、一般に知られた『中央公論』となっていたが、発刊当初からこのような下地があったと言える。
  - 15) 大日本仏教青年会の結成時(明治25年)に夏期講習会の開催が決議された。実施にあたっては第一高等中学徳風会員が中心になったが、会場幹旋などは第三高等中学、大谷派大学寮、本派大学林、同文学寮尋常中学校などの有志からなる関西仏教青年会に託された。文学寮の蘭田宗恵も幹旋に尽力した。
  - 16) 蘭田香勲『有と無』227頁。「反省会雑誌」の表紙もユニークで表紙には大きく *THE TEMPERANCE: A MAGAZINE* と書かれ、発行者として *THE TEMPERANCE ASSOCIATION* と英語表記である。日本語によるタイトル、発行者「反省会雑誌」京都反省会、はその下に続き、象徴的である。
  - 17) 蘭田香勲上掲書 228頁。
  - 18) スプハドラ比丘(本名ジンメルマウン)著『ブヂスナッセ、カテキズムス、ツール、アインヒュールング、イン、ジー、レーレ、デス、ブッドハガウタマ』。序文と校閲は高地黙雷が担当し、梵語/パーリー語は南條文学博士の教えを請うたとある。なお、著者名、表題表記は『仏教概論』による。(オンラインによる国立国会図書館デジタルコレクションから)。
  - 19) よく知られているように、蘭田はサンフランシスコ着任翌年『佛遺教経』を英訳し、パーリー語研究者 Albert Edmund の助言を受けて鈴木大拙との共訳として *The Light of Dharma* (北米本願寺出張所発行)に連載した。
  - 20) 西島覚了は明治6年に、近角常観の生家に近い現長浜市本庄町で生まれ、母親の実家の養子になる前は山岸姓であった。
  - 21) 文学寮は明治21年に普通教校が改称統合されたものである。
  - 22) 大谷光瑞については、1908年から師の指導のもとで西本願寺が行った中央アジア古代文明遺跡探査と発掘は有名。蘭田もヨーロッパ留学から帰国する際、メンバーに加わった。
  - 23) 移民としては1868(明治元)年に153人が海を渡りハワイに向かった。その後アメリカとの正式な移民契約が明治18年に結ばれ、1890年頃には数万人の日本人がいた。ハワイの移民、開教については『編

- 集復刻版 仏教海外開教史資料集成 ハワイ編』（不二出版、2008年）に詳しい。
- 24) このようなキリスト教教会の慈善事業をはじめとする社会貢献のあり方に、当時欧米視察や留学に派遣された仏教僧の多くが影響を受け、帰国後慈善事業や社会活動に関わるようになった。
  - 25) 桑港仏教会文書部編『桑港仏教会開教三十年記念誌』（1960年）「感想」に、本田恵隆による「開教事業の端緒」がある。
  - 26) 翌1899年5月に公認されている。所在地は、1881 Pine St. San Francisco, California.
  - 27) 蘭田香勲『有と無』（理想社、1965年）228頁。
  - 28) 法蔵館 1974（昭和49）年。開教記録としては『編集復刻版 仏教海外開教史資料集成』北米編（不二出版、2008年）に詳しい。
  - 29) 同月24日に行われた。蘭田香勲の著書にボーク街での出張所開場式の写真が掲載されている。
  - 30) この新聞に掲載された写真は桑港仏教会文書部編『桑港仏教会開教三十年記念誌』にも載せられている。
  - 31) この記事は一週後にハワイの新聞 *Hawaiian Star* にも BUDDHIST PROPAGANDA という見出しで転載されている。蘭田が立ち寄ったハワイではこの年ハワイ本願寺（後のホノルル別院）の本堂が落成するなどすでに本格的な開教活動が始まっていて、蘭田らは2日間滞在し、「信徒の請に応じて」法話もしている（8月25日の日記。蘭田香勲上掲書11ページ）。
  - 32) 4頁。『編集復刻版 仏教海外開教史資料集成 北米編 第1巻』（不二出版、2008年）日本人排斥は19世紀終わり頃から激しくなっている。大正2年に巴奈馬太平洋万国大博覧会開催に合わせて開催された「世界仏教大会」で採択された決議文の中に「米国に於ける仏教の伝道を以て日本人排斥の一の原因なりとするが如きは、事実を誣ふる一の謬見に過ぎざるも、此種の偏見の流布は日米両国民の相互の誤解を惹起するの憂あるが故に、仏教徒は極力此種の謬見を匡正排除せんことを努む」とある（『桑港仏教会30年記念誌』『桑港仏教会沿革史』95-96頁）。
  - 33) 同書5頁。
  - 34) 日米新聞社社長我孫子久太郎『桑港仏教会30年記念誌』（表題、頁無し）。
  - 35) 「米国開教30年記念式に遭うて喜びと感謝の雑感」『桑港仏教会開教30年記念誌』11頁。（『編集復刻版 仏教海外開教史資料集成 北米編 第1巻』（不二出版、2008年収録）。
  - 36) 原文は“a two story dwelling”となっているが、蘭田の日記では「随分大きくして三階造りなり。間数14程有之候」とある。この住居兼本願寺出張所は正面が階段状で上がっていて、道路部分が「地下」になっているアメリカではよくみる構造の建物。
  - 37) 1900（明治33）年1月5日 桑港にて総代世話人宛の書簡（19頁）。
  - 38) 『米国開教日誌』の編者香勲は「白人に対する伝道はどの程度まで成功していたか不明であるが、父が常づね10人のほんものの白人信徒を得たのを誇りとしていたことを母が語っている」と述懐している。（30頁）
  - 39) 25頁。
  - 40) *San Francisco call*, May 30, 1900. “The Buddhist Church of San Francisco incorporated yesterday under the title of “The Dharma Sangha of Buddha.”（下線部は筆者による）。
  - 41) 初年度の「ベルリン花祭り」は最近よく知られるようになったが、次の年にも2回目の花祭りが開催された。近角はこの花祭りの開催前に帰国したが、参加した蘭田がベルリンから近角に「当年の降誕会には千両役者たる両兄を失ひし為めに心配致候... 諸友が少なからざる応援を与へられ存外の好結果にてありき」と書き送っている。（求道会館資料書簡3526。求道会館館長近角真一氏ならびに岩田教授から資料の提供を受けた。）蘭田がアメリカで迎えた最初の釈尊降誕日にはサンフランシスコ

- の伝道所でも降誕会が開かれた。この模様を現地の新聞は次のように伝えている。*Celebration of Buddha's Birthday* : The two thousand five hundred and twenty-third anniversary of the nativity of the Buddha Shakyamuni will be celebrated at the Buddhist Mission, 807 Polk street, to-day and to-morrow. The services will be conducted by Rev. K. Nishyima, Dr. J. R. Guelph Norman will preach this afternoon and evening. On Monday evening a Japanese bazaar, will be held. (*The San Francisco call*. April 08. 1900)。
- 42) 『政教時報』35号、1900(明治33)年7月。
- 43) 『仏教海外開教史資料集成 北米編 第1巻』(116頁)。
- 44) 大谷尊由は浄土真宗本願寺派の連枝(大谷光尊、明如の5男)。1923(大正12)年北米開教25周年法要執行にあたり北米巡教を行った。この訪米を機に英語による伝道のための北米開教財団設立に向けた取り組みが始まった。
- 45) 『聖徳太子全集 第4巻太子伝下』(龍吟社、1942年)に収められている。それまでの太子伝が『聖徳太子伝暦』を元にしていたのを、それより古い『上宮聖徳法王帝説』や『日本書紀』などを元に考えるべきであることを強調。それに基づいて、江戸時代の儒学者たちの太子批判が不当であることを指摘している。
- 46) 『教学論集』50号、無外書房蔵版、1888(明治21)年。藺田は「藺田確堂」の雅号で発表している。原著については「修学の余暇エイジン Kunningham(原文のママ)の印度誌を読む五天仏教の興廢等昭々たり...其緒論に掲る玄奘師旅行記を訳出し左に示す」とあるだけで、詳しいことは不明であるが、Cunninghamは玄奘三蔵の旅行記として有名な“Verification of the Itinerary of the Chinese Pilgrim, Hwan Thsang, through Afghanistan and India, during the First Half of the Seventh Century of the Christian Era.” *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 17(1848): 13-62.の著者でもあり、その集約版とも言えるものであると考えられる。
- 47) 南条文雄や高楠順次郎などがある。藺田と同期にヨーロッパに滞在していた宗教(哲)学者には近角常観をはじめ、池山栄吉、松本文三郎、姉崎正治、渡辺海旭らがいた。
- 48) *El Paso Daily Herald*, November 26, 1900, Page 3.
- 49) 31 - 32 頁。
- 50) 拼音 Huishēn (ホイシェン)。
- 51) 比較的最近の考察としては、Gunnar Thompson, *Secret Voyages to the New World—Multiethnic Adventures* (New World Discovery Institute Misty Isles, 2010), 同、*American Discovery III—World Heritage* (New World Discovery Institute Misty Isles, 2013) などが詳しい。
- 52) 例えば、平田篤胤の『大扶桑國考』(1836年)。
- 53) *The Richmond Dispatch* など他紙では具体的に“Fu Sang”と明記されている。“Sonoda followed the chronicles of Hōei Shin, a Buddhist monk, who in A.D., 499, returned to his native heath with an account of a voyage that reached as far south as a land he called Fu Sang...”
- 54) 同文館、1900年、63-64頁。(国立図書館デジタルコレクション) 62頁欄外注には次のようにある。「扶桑即垂米利加説を唱へたるは凡140年前(我が実延実暦の頃)佛国の支那学士 M.de Gulgnen にして1761年刊ローヤル、アカデミイの文科紀要第28巻にあり次て1830年独逸国の有名なる東洋学者 Tkimpproth は前説を翻して扶桑は日本の一部なりといえり白石の説と根拠は全く異れどもその結局に至ては相同じ後13年を経て佛国の学士シュハリエ、トウハラブーエー氏再びドギニイの説を賛して扶桑アメリカ説を唱えき次はノイマン氏ならむ Fusang of the Discovery of America と云へる—



書を参考せよ」

- 55) C. G. Leland, *Fusang or the Discovery of America by Chinese Buddhist Priests in the Fifth Century* (1875)、E. P. Vining, *An Inglorious Columbus : Or, Evidence That Hwui Shan and a Party of Buddhist Monks from Afghanistan Discovered America in the Fifth Century, A. D* (1885).
- 56) *The Richmond Dispatch* (February 19, 1901, Page 4), *The Houston Daily Post* (March 01, 1901, Page 4)。後者の記事は前者からの転載。
- 57) Library of Congress (<https://chroniclingamerica.loc.gov/search/papers/>) による。検索にあたっては立命館大学図書館レファレンス係のスタッフにお世話になった。
- 58) 扶桑について別の新聞では誤解を避けるためか“Fu Sang, now identified with Mexico”と蘭田の名前に言及していないものもある。
- 59) この扶桑木の学術名称は *American Old, or Agave America* で和名は「リュウゼツラン」(竜舌蘭)。
- 60) これについては後述する。
- 61) 約 8700km。
- 62) 前掲の E. P. Vining (1885) では他の多くの根拠とともに、なぜメキシコが「扶桑国」と呼ばれたのかという点について、中国語の借用語の発音規則から *Fu-sang-kwoh* と *Me-xi-co* との音声上の対応関係を論じている。(405-406 頁)
- 63) E. P. Vining (1885) の Chapter XXXI *Various American Traditions: Buddhism*, Chapter XXXII *Religious Customs and Beliefs*, Chapter XXXIII *The Pyramids, Idols, and Arts of Mexico* などの章は図入りで「墨其西哥中佛教の勢の及べる多数の証拠」について論じている。
- 64) 『蘭田宗恵米回国教日誌』では「Battes 氏」となっているが(32 頁)、*Batres* の誤植である。
- 65) メキシコのこの地域の古代文明はテオティワカン、トルテカ、アステカ文化へと続いたとされる。
- 66) 『教海一瀾』132 号。『米回国教日誌』にも転載されている。1901 (明治 34) 年 7 月、68 頁。
- 67) 具体的な引用源は示されていないが「ミルー氏」と「ニウマン氏」の見解としている。「ニウマン氏」とは多分、Professor Karl Friedrich Neumann であろう。
- 68) ダスタバダイヒタル氏の見解として、インドのカースト制などは平等仁慈の精神からいえば相反するが、仏教はこれさえ認めて、あえて破壊しようとはしなかった。インドにおける諸神、西洋におけるキリスト教、日本における神についても同じで、これが仏教の膨張力の源であるである旨の見解が引用されている。
- 69) 蘭田の日記には「当地の日本人は皆々若年にて、日本に居り候はゞ仏前に参詣せぬ人々なるに、当地へ参りたるが為仏法を慕ふ氣も生じ候事と存候」とある。(1889 年 10 月 22 日 尼講御中宛)。
- 70) 近角常観研究資料サイトにある求道会館所蔵書簡資料に、帰朝途中の蘭田が近角常観に送った「11 月 8 日 シンガポールにて」とあるハガキが残されている(資料番号 1203)。それによると、蘭田は「本山より帰朝せよとの電報に接し」1903 (明治 36) 年 11 月 6 日博多丸に乗り込み帰途についている。神戸へは 23 日帰着の予定で、再会を楽しみにしている、と記されている。

(三宅 正隆, 立命館大学国際関係学部教授)

## The Eastward Transmission of Buddhism: Japanese Buddhist Priest Shuye Sonoda's Journey of Exploration to Fu Sang (Mexico)

Buddha's teachings spread afar from its roots in India, through Central Asia, on to China and finally to Japan. This has been termed as "the eastward transmission of Buddhism" (Bukkyo tozen). Buddhism has developed and flourished in Japan ever since it arrived there in the sixth century. But this was not the end of the story. In the late-nineteenth and early-twentieth centuries, a new movement of Buddhism was started by Buddhist missionaries who took it across the Pacific Ocean to the Americas. Shuye Sonoda was one of the earliest missionaries sent to San Francisco to minister to the spiritual needs of their Japanese countrymen and try to convert non-Buddhists there. Although he was busy everyday carrying out his duties there, he was deeply preoccupied with one hidden desire—a desire to confirm the old Chinese chronicles of a Buddhist monk in the fifth century. Those chronicles said that a Buddhist monk had visited the American continent one thousand years before Columbus and had carried the Buddhist faith along the Pacific coast from Alaska to Mexico (Fu Sang). Sonoda, as the first missionary to the mainland of America from the Honganji Temple, wanted to confirm this, since it may have represented the first eastward advance of Buddhism. After spending two years in San Francisco, Sonoda did the journey to Mexico just before he crossed the Atlantic Ocean to Europe to study Buddhism at college. Two years later he moved to India to join the Otani expeditions to Buddhist sites around India and China. He literally traversed the world in an eastward direction with Buddhism. This paper will try to find the deeper meaning of "Bukko tozen" for Sonoda by examining the historical events mentioned above, with special attention to his journey of exploration to Mexico.

(MIYAKE, Masataka, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)